

# 学園

# だより

地方競馬益金事業

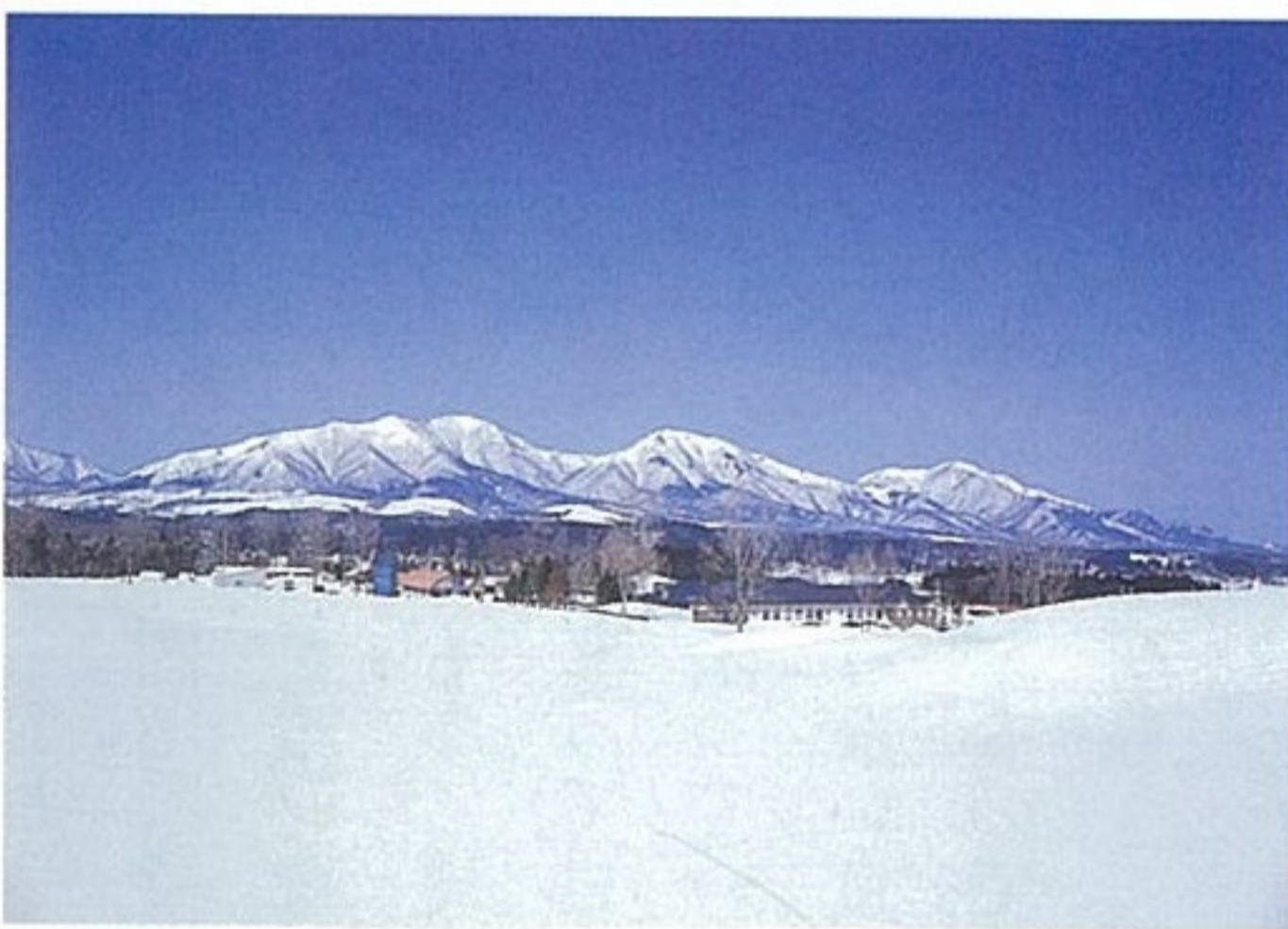
平成10年2月20日発行

財団法人

中国四国酪農大学校

電話 (0867) 66-3651

FAX (0867) 66-3652



「ひるどき日本列島」(H9年8月29日)の一場面より

# 巻頭のこ と ば

校長 古好秀男



希望に燃えた輝かしい新年を迎えられたことと思います。

今年の冬は、エルニーニョの影響なのか、雪が少なく雄大な蒜山三座も山脈が見えて白黒のまだら模様でなんだか淋しそうな気がします。

この雪を楽しみにしている子供たちやスキーヤーを始め、各種冬期大会を計画

しておられる関係者の心配は大変なものだと思います。

雪は自然のダムの役目を果たし、春になると徐々に溶けだし山や川の水量を保つてくれています。冬期に雪が少ないと野山の保水力が低下して春先の水不足となり、人の生活はもとより農作物の栽培に大きな影響を与えることにもなりかねません。

世界の物価の動向は、世界貿易機関農業協定(WTO)の含意の上で機能しており、来る二〇〇一年からの協定改定の見直しに伴う次期交渉が今年から進めら

れようとしています。日本においても行政改革を中心に、金融システム、地方分

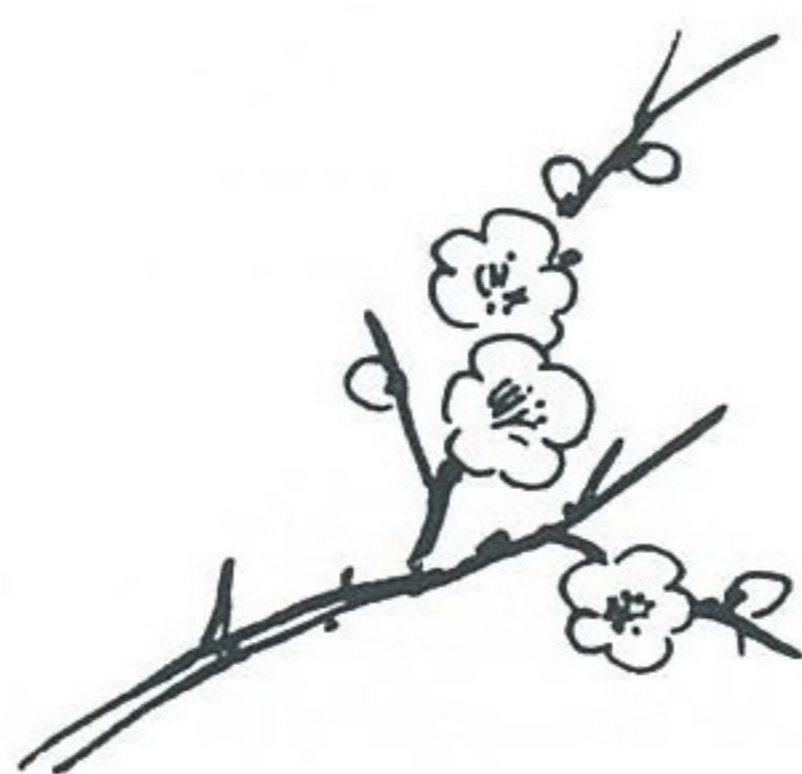
権、経営機構改革などで合併などが積極的に推進され、経済の流れが大きく変わろうとしています。現状では、経済の動向を見ながら動揺することなく、自分の立場で精一杯努力すること以外には道がありません。日進月歩の発展の中で経済が落ち着くまでには相

当の年月を必要とすることでしょう。まずは自然体で長期的視野に立脚した展望をもつて足元を固めることです。あらゆる経済に、コストの低減が最大の課題と

なるでしょう。

岡山県で開催されるホルスタイン全国共進会に一頭でも多く優良改良牛を出品しようではありませんか。

困っているほど、思いもかけない良いアイデアが浮かぶものです。元気を出して進もう。明日のために！



も く じ

○巻頭言

校長 古好秀男

○教務課だより

○オーストラリア  
研修を終えて

○卒業生から  
・職員となつて  
・専攻生として

○第一牧場だより

○第二牧場だより

○卒業生名簿  
在校者名簿

# 教務課だより

”より高度な酪農後継者・技術者および酪農ヘルパーなどの養成を図る“をスローガンに今年度から新カリキュラムを励行していくことになりました。これから

も、一層のカリキュラムの充実を図っていくこととなります。〇第三期生

## 卒業証書授与式

平成九年三月二六日、第三期生二一名(別表)が卒業。

## 〇第三三期生入学式

平成九年四月四日、第三期生三〇名(別表)が入学。

## 〇酪農ヘルパー研修生の受け入れ

今年度から新設となった研修生養成の施設を利用して、一般研修生(一〇名)および本校の第三三期生(二九名)の計二九名が受講し、新たなヘルパー要員として認められました。



(ヘルパー研修施設)

## 〇牛削蹄師講習会

(社)日本装蹄師会主催

の牛の削蹄講習会が本校を会場として開催され、当校の学生一七名と一般の講習生が多数受講しました。



## 〇家畜人工授精および受精卵移植講習会

### 校外研修をより一層効果

のあるものにするために、今年度からは一年生で家畜人工授精の講習、二年生で受精卵移植の講習を受けるようにカリキュラムを改めました。今年度は改正年にあたり、一年生と二年生の二学年が同時に受講したため、総勢で一般講習生を含め七〇名近くなり、教官は

成九年一二月九日から開講)

## 〇特別講義の実施

酪農分野をより深く専門的に学習するために、家畜改良事業団、総合畜産センターなどの専門家を講師に招きました。また、広く社会人としての教養を身につけるため、構成県の方々講師をしていただきました。

## 〇その他

今年度夏、NHKの人気番組「ひるどき日本列島」の取材を受け、第三三期生を中心に酪農高等学校の一日の出来事、牛との触れ合い、実習の状況などを広く全国に紹介してもらいました。また、そのほかに日本農業新聞など新聞・雑誌に広く本校を紹介していただき、全国的に知名度が高まりました。

## 職員紹介

校長 古好 秀男  
次長 山下 稔

(総務部)  
部長 長尾 敏彦  
主事 小谷健一郎

### (教務部)

部長 西家 忠治  
課長 岸戸 武士  
技師 錦織 拓美

運転技術員 池田 富幸  
調理技術員 講元 勝代

〃 〃 西田 良子  
〃 〃 池田 厚子

### (経営部)

部長 (次長兼務)

第一牧場長 貝原 裕彰  
技師 高見 剛

助手 樋口 照夫  
第二牧場長 山田 徹夫

技師 高取 健治  
〃 〃 横内淳一郎

助手 磯田 博  
〃 〃 小笠原正芳

卒業して...

また

新たに!

### 専攻生として 再び入学して

檀上 賀洋

この学校を卒業して約四年と半年、まったく酪農とは関係のない仕事につき働きました。やりたかった仕事なんですが、人との接触が多い毎日正直に言って、人間がいやになりました。そんな毎日で忘れられなかったのが酪農という世界に足を踏み入れた過去の二年間でした。私は非農家で何の知識もなく、ただ牛が好きと言うだけでこの学校へ入学しました。学生の時みたいへんでしたが、これを仕事にするととなると、もっとたいへんだと人にも言われましたし自分でも思うっています。しかし周りの人の仕事を見ても、それぞれたいへんだと私は感じています。それならば自然に囲まれた空気の良い場所、人間との接触も少なく、多少経験のある好きな

牛を世話する牧場で自分の時間を使いたいと思いましたが、しかし約四年と半年の間、この世界から離れていた私は、とてもこの世界に入る自信と勇気がありませんでした。そこで「研修して過去二年間の感覚を取り戻し自信と勇気をつけよう!!」と思いたって再びこの学校へ専攻生として入学しました。働きたい牧場は、育成牛を主に扱う育成牧場です。いい牛を作る基本となる育成期の牛を飼養管理する仕事です。やりがいの難しいですが、やりがいの

ある仕事だと思っっています。深く考えてしまう性格で、悩むことが多い毎日ですが、がんばって前進して行こうと思います。がんばればそれだけのものが返ってくる世界だと信じています。

### 学生から職員へ

小笠原正芳

私は、財団法人中国四国酪農大学校卒業後、同大学校に就職しました。

学生時代は、自分の事だけで余裕がありませんでした。職員になってからは、牧場実習の中で学生が変わることに同じ作業内容を教

えたり、機械の使い方を学んだり色々と思っていたよりは、新しい牛舎が完成する事もあり、まだまだ学ぶ事がたくさんあります。

昨年は教わる立場でした。今年からは、今まで学んできた事を学生に教える立場になりました。なかなかうまく教える事ができません。来年からは自分の学生時代を知る学生がいなくなるので少しは教えやすくなると思います。

就職してから十カ月が経とうとしています。わからない事、学ぶ事があります。精一杯頑張っていきたいと思っています。

### オーストラリア 研修を終えて

安齋さとみ

オーストラリアといえは、”コアラとカンガルー”。私にとってオーストラリアのイメージは、それくらいのものでした。いざ、オーストラリアに

行ってみて、私のオーストラリアのイメージは、がらっと変わってしまいました。牛は、広い広い放牧地で野生化し、たくましく育っていました。私の印象に登り、牛の観察していたとき、45°以上ありそうな急斜面を牛が、いとも簡単にスイスイ登っていたこと、



第32期生 平井 孝弥 画



第32期生 平井 孝弥 画

ブッシュに入ってウロウロしていたことです。日本のイメージとは違って見えませんでした。

オーストラリアの牛は人間に全然慣れていないのが、少し残念でした。手をおぼしてても、誰一人として寄ってくるものはいませんでした。無理もありません。子牛は二ヶ月もすると放牧に出して後はほったらかしなのです。搾乳の仕方、牛の管理にせよ、何にせよ、日本とはやっぱり違いました。

Mckenzie家は、人を雇っているので、暇な冬は一ヶ月の休日をとることができ、毎年色々な所へ旅行に行きます。これは大きな酪農家の特権だなと思いました。毎日3・30に起きているMckenzie夫妻を私は尊敬なまなざしで見ずにはいられません。時には疲れて機嫌の悪い日もあったけれど、普段は冗談の飛び交う楽しい家族で色々なことを話し

ました。

日本のことを説明するにあたって、一番苦労したところが「七夕」を説明するときでした。単なるおとぎ話を真剣に教えようとしたのですが、たぶん半分も伝わってなかったと思います。英語は頭が痛くなる程さっぱりわからなかったけれど二ヶ月会話しつづけたところ、それなりに上達したと私は思っています。

四輪バギーで草地に出れば、カンガルも見ることができたし、420頭の牛に一人でミルクカーをつける

オーストラリア研修

(平成9年9月2日～11月2日)



左から、三谷、安齋、谷川

という経験もし、オーストラリアの文化も大いに感じることができたけれど、一番嬉しく思い、心に残っているのはオーストラリアの人々を知り、コミュニケーションができたこと、そしてもう一つの家族ができたことです。つらいこともあったけれど、本当に行けて良かったと思っています。

## 二ヶ月間のオーストラリア研修を終えて

三谷 礼子

準備を行い、九月一日夜の八時に関西国際空港を出発しました。二日の昼十二時すぎぐらいにオーストラリアのアデレードに着きました。『オーストラリアに来た』という実感はそれほどありませんでした。しかし、英語という言葉のコミュニケーションは難しく、なかなか理解できるものではありませんでした。

私はオーストラリアも日本も同じ一つの国だと思

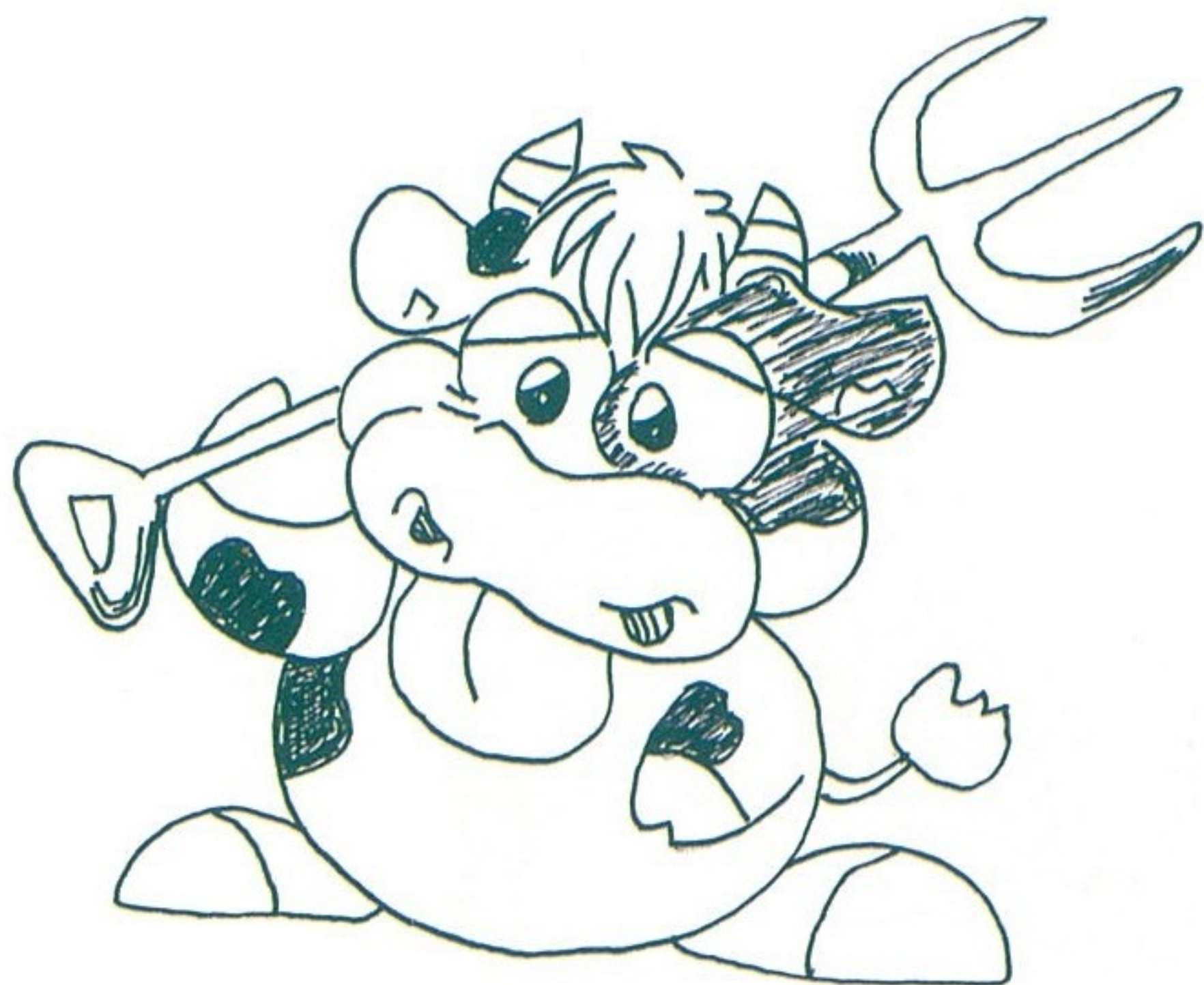
いました。日本に比べてオーストラリアは、国土が広大だけでなく、きれいな環境でした。地域毎に住宅地・商業・工業・農業(酪農業)とそれぞれ分野毎に団地化し、区分されており、日本のようにいろいろな種類のものが、込み合っていないで、スマートに見えました。また、緑も多く公園や道路内外に花や木が植えられてありました。

さて、オーストラリアの酪農を見て広大な土地を有効に利用し、また、作業面ではかなり大雑把なところがあるなあと感じました。日本のような舎飼ではなく、一年中放牧をして搾乳のときだけパーラー(建物の中)に追い込み、搾乳が終わるとまた草地へ帰っていく毎日でした。朝は牛を追い、搾乳をし、昼間は牧場の修理や子牛のエサやり・サイレージづくりなどを行い、夕方はまだ1時間かけて牛を追い、搾乳をす。これが一日の流れでし

た。搾乳は50頭が一度に搾乳できるロータリーパーラーでした。三人から四人で1時間半をかけ350頭の牛を搾乳することが出来ます。また、オーストラリアの、酪農は基本的に土、日曜日の作業は牛追いと搾乳だけでした。

オーストラリアへの研修に行つて、日本とは違う酪農や国を見、いろいろなことを体験してとても勉強になったと私は思います。酪農については規模も飼養管理方法も異なり、日本で同じようなことはできません。しかし、日本の酪農のなかにもオーストラリアの酪農の良いところや参考にできるところは参考にしていきたいと思ひます。私にとってとても充実した二ヶ月間の研修でした。最後になりましたが、オーストラリア研修に行くにあたり、いろいろとご迷惑をおかけした皆様に対し、深くお礼申し上げます。

# 第1牧場だより



卒業生の皆様、またいつもご協力を頂いている大学の関係者の皆様には、その後益々ご活躍のこととお喜び申し上げます。酪農高等学校では冬の北風が益々強くなり十月末には初雪が見られました。

平成九年度の第一牧場の陣容は、前場長の小阪和正場長が津山家畜保健衛生所

に転勤し、岡山県畜産課より貝原裕彰場長が新しく配属されました。また、高見技師、樋口助手は前年度に引き続きがんばっています。

さて第一牧場では四月初めに牛舎の壁を白、扉を赤、門をピンクにと、若干のイメージの刷新を図り新年度を新しい気持ちでスタート

しました。

同月には総合畜産センターより採卵を目的とした岡山県下でもトップクラスの育種価を持つ和牛雌子牛を二頭導入しました。将来的には採卵技術の向上のための学生の実習に役立てていきたいと考えています。

今年の牧草の収量は雨で悩まされはしたものの例年並でした。しかし、トウモロコシ畑ではイチビ、チヨウセンアサガオが大量に発育し、学生、職員共に毎日イチビ抜きの日々が続きました。そのため天候も相まって収量は例年に比べ著しく少なく、約半量しかとれませんでした。

第一牧場恒例の「秋のワラ取り」については好天に恵まれ順調に成果を上げました。ワラの品質も良く肥育牛も喜んで食べております。

## 飼育頭数

平成10年1月1日

区分	第一牧場	第二牧場
経産牛	36	85
未經産牛	14	22
育成子牛	21	25
乳用牛計	71	132
肥育牛	49	—
繁殖和牛	3	—
肉用牛計	52	—
合計	123	132

第2牧場はジャージー牛 (単位：頭)

今年にはエルニーニョ現象の影響か、暖冬になると報じられています。他県から来た学生には蒜山の冬は厳しく、現在一牧では冬の寒冷対策を講じているところです。牛は夏の暑さから解放され、乳量、乳脂率も順調に伸びてきています。

今年の冬は蒜山(川上村)に新しくベアバレースキー場が開設され、またすぐ近くには中四国地区最大の大山スキー場もあり、遊びに来られることも多いかと思

います。近くにお寄りの際には是非、酪農高等学校まで足を伸ばして休んでいってください。



# 第2牧場だより



例年に比べ雪の少ない蒜山三座を眺める今日この頃ですが、卒業生の皆様方にはお元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

冬が一足早く訪れる蒜山高原では十月末には初雪となり、はや冬将軍到来かと冬支度の心配をしましたが、その後は小春日和の日が続き、ジャージー牛はも

とより職員にとっても過ぎしやすい冬になっております。

さて、四月には、第二牧場の職員に異動がありましたのでご報告いたします。第二牧場で学生の実習指導等に努力されていました錦織技師が教務課に内部異動となり、高梁振興局から転勤してこられた高取技師と



第2牧場新牛舎建設風景

平成八年度にこの酪農大学校を卒業した小笠原助手が配属となりました。

また、この酪農大学校に長年勤務された臨時(常時)の三牧孝徳さんが今年十月をもって退職されました。第二牧場は、現在、山田場長を中心にジャージー牛の改良や飼養管理技術の向上に日々努力しています。

今年春の訪れも早く、牛達の放牧の開始時期が例年より半月ほど早まり、五月の一番草も順調な発育でありました。ところが、七月から八月にかけての天候不順でソルゴーやトウモロ

コシの発育が著しく悪く、例年の半分くらいの収量となってしまうましたが、職員の日々の努力によって、ロールサイレージの収量は、計画していた以上のものとなりました。牛の分娩計画も順調で、かわいい子牛達は元気いっぱいミルクを飲んでいきます。

今年も、相変わらず見学や搾乳体験の希望者の対応に追われ、また、休日には放牧地を眺める観光客でにぎわいをみせ、ジャージー牛たちは、写真撮影のモデルに大忙しでした。

本年度は、新搾乳牛舎と堆肥舎が完成予定です。より一層、牧場の向上に職員一同努力していきたいと思っております。

お近くにお越しのさいは、是非お立ち寄り、アドバイス等をいただければ幸いです。



平井 孝弥 画



安齋さとみ 画